

歴史は未来の羅針盤

# 温故知新

これまでに刊行しました『近江日野の歴史』は、第一巻「自然・古代編」、第二巻「中世編」、第三巻「近世編」、第四巻「近現代編」、第五巻「文化財編」、第六巻「民俗編」、第七巻「日野商人編」、第八巻「史料編」となりました。教育委員会や各公民館において、一冊四千円で好評販売中です。ぜひ、お買い求めください。

『近江日野の歴史』第四巻「近現代編」を発売して以来、近現代の日野の姿を様々な視点から紹介しています。今回は、そのなかから明治・大正時代の文化について紹介します。

## 明治・大正時代の文化

明治中後期から大正期にかけては、さまざまな文化が興隆しました。当地でも明治期から芝居小屋や能楽堂があり、文化・娯楽の場となっていました。また明治三十九（一九〇六）年に大字大窪に日野文庫という一般向けの図書館も設立され、広く学びの場となりました。

この時期に、郷土の歴史の顕彰や、地域の遺産を見直し保存する動きが起こり、仏像や建造物の国宝指定がされるようになります。現日野町域では明治四十四年に八件の仏像が国宝指定を受けました。これらは戦後、法律の改正により

重要文化財となっています。

このような歴史を見直し、地域の遺産を保存する動きは、『近江日野町志』の編さん事業や昭和初期の石楠花溪保勝会の創設などにつながっていきます。

## 蒲生氏郷像の建立

郷土の歴史顕彰のひとつに、蒲生氏郷像の建立が挙げられます。大正六（一九一七）年六月十八日、日野町長野田東三郎らが発起人となった有志者の会合が日野町役場で開かれ、氏郷像の建立が日野町教育会の事業として行われることが決まりました。

建設にあたって課題となったのが、銅像の容貌です。この点は、歴史学者で東京帝国大学教授の上参次（かみさんじ）の協力を得て氏郷の画像を検討し、会津興徳寺所蔵の画像によることにし、鯨尾兜は京都帝室博物館学芸委員の関保之助に問い合わせて稲垣子爵家の所蔵品に模

したものにすることにしました。

大正七年七月に鑄造場建築が始まり、翌八年二月十七日に鑄造完成し、四月二十日、銅像を鑄造場から運び出して建立しました。銅像の意匠は、氏郷が秀吉の朝鮮出兵に伴って出陣する途中に、中山道から綿向山を望んで「思いきや

人の行へぞ定めなき我が故郷をよそに見んとは」と詠んだとされる情景をあらわして、左手に短冊、右手に毛筆を配したものでした。像の高さ八尺三寸（約二・五メートル）、使用した銅の重さは三五〇余貫（約一・三トン）でした。

## 蒲生氏郷像の除幕式

四月二十六日、男爵前田直行、滋賀県知事、蒲生郡長などの来賓が列席して除幕式が行われました。氏郷にゆかりのある男爵前田直行が除幕、侯爵前田利為の祝辞を代読し、来賓者の挨拶が行われました。また、三上参次などからの祝

電も披露されています。

この日は、蒲生家の菩提寺である村井の信楽院で、氏郷の遺品や蒲生家に関する古文書・記録・絵画・木像・仏体・武具などの展覧会が行われました。また、雲雀野に日野町の各大字から花幟（ほいはのぼり）（ホイノボリ）が出され、武者行列・撃剣会・浪花節などのイベントもあわせて行われました。この日五万もの人が日野に集まったともいわれており、空前の人出となりました。除幕式の様子は、同年八月に『蒲生氏郷銅像序幕記念帖』として刊行されました。

この像は、太平洋戦争下の昭和十九（一九四四）年、金属回収によつて供出されて、姿を消しました。雲雀野に再び蒲生氏郷像が戻ってくるのは、昭和六十三年のことです。



▲雲雀野で行われた蒲生氏郷像除幕式（大正8年4月26日）